

令和7年度第4回

寝屋川市子ども読書活動推進計画策定委員会 会議報告

開催日時 令和8年2月17日（火） 午前10時00分より

○開催場所 寝屋川市役所議会棟 4階 第Ⅰ・Ⅱ会議室

○所要時間 10:00～11:05

○出席者（委員） 15名中 14名出席

尾崎（委員長）・亀井（副委員長）・川邊、蔵本・九條
浅田・竹中・香川・木村・岡・坂本・古田・岡元・山本

（事務局）柴田中央図書館副係長・西岡・塩川（3名）

（傍聴者） 2名

○案件

1. 第4次寝屋川市子ども読書活動推進計画（骨子）について（多読について）
2. その他

○資料

1. 次第
2. 第4次寝屋川市子ども読書活動推進計画（骨子）
3. 今後のスケジュール
4. 委員名簿
5. 策定委員会の規則
6. 前回委員会での意見まとめ
7. 総合教育会議（R7.11.17開催）における読書についての主な意見

案件 1 第 4 次寝屋川市子ども読書活動推進計画（骨子）

1 これまでの経過について

（事務局からの説明）

① 前回策定委員会までの経過

- ・ 策定委員会は、これまで 3 回開催し、6 月の第 1 回策定委員会では、主に、第 3 次計画の取組検証を行い、課題等について情報共有を図った。
- ・ 8 月の第 2 回策定委員会では、各機関や各所属での読書活動の取組について報告を受け、ボランティア活動の内容をはじめ、学校や幼稚園・認定こども園での読書活動の取組等について、情報共有を図った。
- ・ 10 月の第 3 回策定委員会では、「子どもの読書量を増やすためには」をテーマに、就学前・学齢期のそれぞれのステージにおいて、それぞれどのような取組が必要なのかを意見交換をした（資料 5 参照）

② 前回策定委員会から第 4 回策定委員会開催までの経過

11 月に総合教育会議が開催され、学齢期の読書活動についていくつか意見が出てきたので、共有させていただく。総合教育会議での主な意見は次のとおり。

- ・ 就学前だけでなく、学校教育の中でも、子どもたちの本に接する機会、読書ができる環境を確保すべきでないか
- ・ 考える力をしっかりと身につけていくための取組として、読書を推進していくことが、ディベートともう 1 つの寝屋川教育の柱になっていくのではないか
- ・ 家庭環境はそれぞれ異なるので、学校教育である程度、読書の機会を設けることは大切である
- ・ 授業の中での本の活用の在り方や、教育委員会として、どの程度、本を読んでもおく必要があるのかということ考えた上で、子どもたちの読書の在り方を形作っていく必要があるのではないか
- ・ 社会教育としての読書（本が大好きな子を増やしていく）と学校教育としての読書（論理的思考力を育成する）を整理して考えてもよいのではないか

以上が総合教育会議での意見であるが、事務局としては、総合教育会議での各委員からの意見を重くとらえ、これまでの検討案を修正し、資料 1 として整理したところである。

2 第4次寝屋川市子ども読書活動推進計画（骨子）について（多読について）

（事務局からの説明）

- ・資料1は、第4次寝屋川市子ども読書活動推進計画のイメージ図であり、これまでの策定委員会での意見と、総合教育会議での意見を踏まえ作成したものである。第4次寝屋川市子ども読書活動推進計画は、これまでの「読書習慣」の定着を目的とした読書活動と本にたくさん触れることを意味する「多読」を軸とした読書活動の2本で構成するものである。
- ・計画の概要としては、読書習慣の定着を目的とした読書活動に「多読」を軸とした読書活動を加えることによって、読書習慣を身に付けながら、語彙力・読解力を高め、論理的思考力の向上を図るものである。
- ・資料の左部分は、「読書習慣」の定着を目的とした読書活動であり、就学前期、学齢期と、本好きな子どもたちがたくさん増えるように、これまでの取組を継続して行っていくものである。
- ・資料の右部分は、「多読」を軸とした読書活動であり、新たな取組として記載している。目的としては、小学校入学時から目標冊数を意識した積極的な読書活動を推進することにより、語彙力・読解力を高め、論理的思考力の向上を図るものであり、目標冊数を定め、学校教育において取り組んでいくことにより、考える力を育成していくものである。詳細については、今後、事務局で検討する。

（各委員からの意見）

- ・学齢期に重点を充てる取組はいいことであるが、子どもと本をつなげる人が重要である
- ・就学前期の本を読んでもらうことから、自分で本を読むことへの移行が大切である。
- ・ただ単に数だけでなく、本の内容・質も重要である。はじめは、読みやすい人気シリーズを読んだとしても、そこで終わらずに、どう質を向上させていくかが重要である。
- ・最初は自分が読みやすい本や同じ本ばかり繰り返し読むことも重要なことだと思う。本を読む習慣が身に付けば、そのうち本が好きになって、違う本を好むようになるのではないか。そこに大人が関わり、様々な本を提示してあげることによって、読書の幅が広がるのではないか。

- ・冊数は、学年や年齢別だけでなく、個々のレベルに応じた冊数を設定することも必要ではないか。特に就学前期については、読んだ数よりも、どれだけおもしろい本を見つけたかが大事である。
- ・目標冊数の設定については、様々な意見があるが、設定した方が、子どもたちは頑張るのではないか。入口としてはいいが、どのようにして、達成感を持たせることができるかが重要
- ・例えば、西小学校は多読に力を入れており、〇冊読んだ人には、記念バッジを配布するなどしている。子どもは、何かご褒美をもらえるとうれしい。
- ・学齢期の子どもたちの読書活動を推進するにあたっては、学校司書の1校1人配置は必要でないか。本と子どもをつなぐ仲介者が必要。
- ・多読が議論の中心になっているが、読書習慣の定着が土台にあって、その上に多読の概念を入れるということを踏まえて、考えていくべきである。
- ・そのためには、読書の習慣化が必要である。
- ・小学校では、図書時間がああり、1人1冊～2冊は必ず本を借りることとなっている。借りた本のすべてを読んでいるかどうかはわからない。個人差がある。
- ・学校によっては、積極的に読書通帳を配布して読書推進に励んでいる学校もある。
- ・紙ベースの本ではなく、電子書籍を読む子もいるかもしれない。新聞や雑誌なども含めてよいのではないか。
- ・昔、絵の本ひろばという事業に関わって、中学生が絵本（絵や写真集）と触れ合う場面をみた。普段あまり本を読まない学生が、楽しそうに本に触れ合う姿を見て、読書環境、場面の設定が大事であることを再認識した。

3 その他（事務局説明）

- ・今後のスケジュールについて説明。当初、今年度中の作成を予定していたが、さらなる議論が必要となったこともあり、次年度も、継続して会議を開催する予定である。引き続き、ご協力願いたい。